

遺伝子治療シンポ

日中韓研究者が
現状や展望報告

岡山

第4回東アジア遺伝子治療推進産学シンポジウム（岡山大ナノバイオ標的医療イノベーション・清華大健康科学基金主催）が21日、岡山市内であり、日本、中国、韓国の研究者が遺伝子治療薬の開発をめぐる現状や展望などを報告した。

表。岡山大の公文裕巳名誉教授（新見公立大副学長）は、岡山大が発見したがん治療遺伝子「REIC」

を用いた前立腺がんの臨床研究について「腫瘍が消えたケースもあり、安全性と効果が確認された」とし、今後の展開として「大手製薬会社と連携した悪性中皮腫に対する治療（臨床試験）が近づいている」と説明した。

このほか、脳腫瘍、膵臓がんなどへの応用の可能性に

関する報告もあった。約80人が聴いた。

（伊丹友香）

3カ国の研究者が遺伝子治療薬の開発について情報交換したシンポジウム

